普通學校
修身書 卷三

朝鮮總督府

K710.1
1a
3

710.1-1a-3

K710.1
1a
3

普通學校修身書

卷三

朝鮮總督府

もくろく

第一　師をうやまえ……一
第二　友だち……三
第三　皇太后陛下……五
第四　孝行……六
第五　兄弟……八
第六　健康……十一
第七　規律……十三
第八　禮儀……十五
第九　勤勞……十七
第十　忍耐……十八
第十一　貯蓄……二十
第十二　神をうやまえ……二十三
第十三　迷信におちいるな……二十四
第十四　公正……二十六
第十五　人の名譽を重んぜよ……二十八
第十六　まご心をつくせ……三十
第十七　公德……三十二
第十八　公益……三十四
第十九　恩にむくいよ……三十六
第二十　忠君愛國……三十八

第一　師をうやまえ

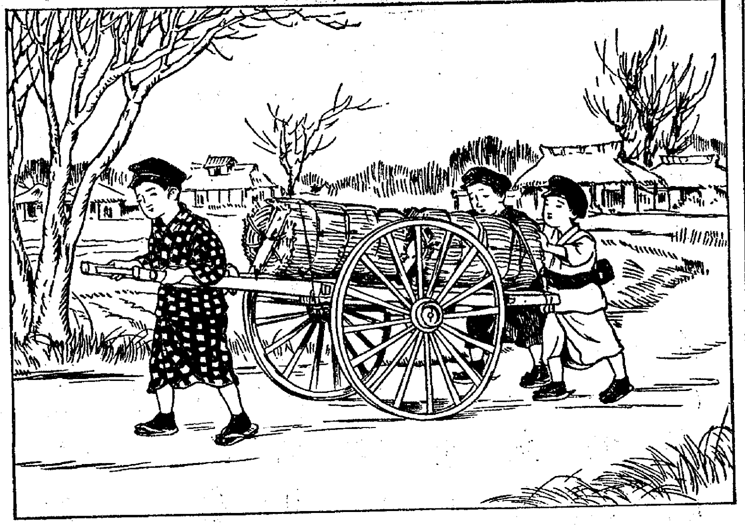
李退溪は六さいの時から、きんじょの先生について學問をはじめましたが、朝早くおきてみなりをとゝのえ、先生のところにつくと、ていねいにあいさつをしてから

本をならいました。
十二さいの時からは叔父の李松齋について學問をすることになりました。松齋は大そうきびしい人でありましたが、退溪はつねに松齋をうやまい、おしえられたことをまもったばかりでなく、自分からすゝんでべんきょうしました。
退溪は後になだかい學者になりましたが、いつも「自分が學問をおこたらなかったのは松齋先生のおかげである。」といって、心からありがたく

思い、ながく松齋をしたいました。

第二　友だち

ある小學校に、さむくなってもたびをはかずに來る男の子どもがありました。ある朝、その子どもが女のたびをはいて來たので、あたりの子どもたちがわらいました。
これを見た三人の友だちがきのどくに思って、家のようすをきいて見ると、おかあさんはなくなり、おとうさんは病氣をしていることがわか



りました。三人のものは一そう氣のどくに思って「なんとかしてたすけてあげようではないか。」とそうだんしました。それからは學校がすむと、三人があつまって、しんぶん紙でふくろをつくったり、つめたいのに

せりをつんだりして賣りました。そうしてそのお金で二ひょうのすみを買い、車につんでその友だちのうちに持っていってあげました。

第三　皇太后陛下

皇太后陛下はお小さいころから御しっそにあらせられ、又大そうおなさけぶかく、つねに人々をおあわれみくださいます。

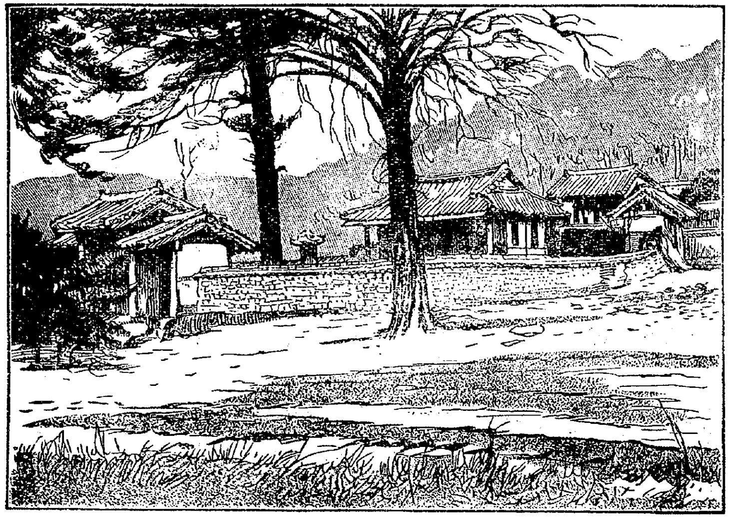
大正十二年、東京に大じしんがあった時、陛下は病院やきうご所などをお見まいになって、さい

なんにか丶ったものをあつくおなぐさめあそばされました。

陛下は又學校やはくらんかいなどにたび〱おいでになって、わが國の教育や產業をおす丶めあそばされます。

第四　孝行

李栗谷が五さいの時の



ことでした。おかあさんがおもい病氣にか丶りましたので、栗谷はそっと祠堂におまいりして、おかあさんの病氣のよくなるようにおいのりしました。

又十二さいの時、おとうさんが大病にか丶りま

したが、自分をわすれて一しょうけんめいにかん病しました。

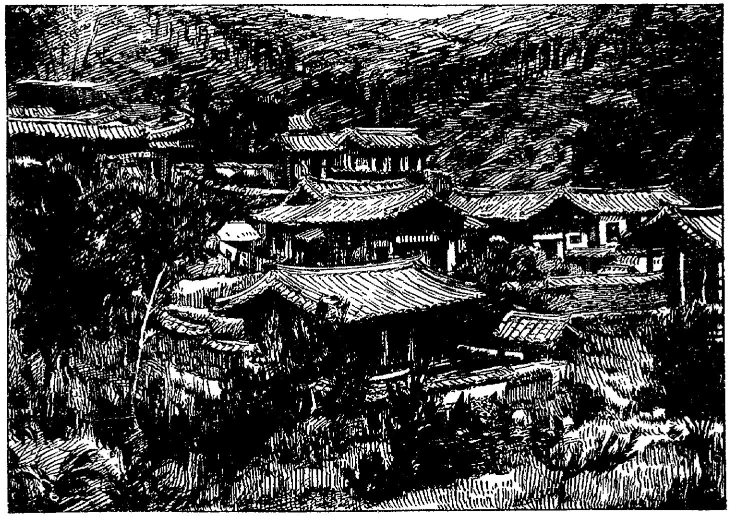
栗谷はこのように大そう孝行の心がふかくて、いつも親を安心させたり、よろこばせたりすることに心がけました。そうして親のなくなった後も、つねにしたってよくおまつりをしました。

孝ハ徳ノハジメ

第五　兄弟

李退溪が八さいの時のことでした。にいさんがあやまって手をきりました。退溪は大そう心ぱいして、なきながらおかあさんに知らせますと、おかあさんは「けがをしたにいさんがなかないのに、おまえがなくのはどうしたわけか。」ときゝました。すると退溪は「あのとうり血が出ています。きっといたいにちがいありません」。といゝました。

こんなに退溪は小さい時からにいさんのこと



を思う人でありましたが、にいさんも又よく弟をかわいがりました。兄弟が別に家を持ってからも、つねにいき來して仲よくしました。にいさんがたずねて來ると、退溪はいつもにこにこして門口まで出むか

え、へやにはいると、にいさんを上座にすわらせて、親しく話しあいました。

このようすを見た人々は「自分たちもあのような仲のよい兄弟になりたいものだ。」といゝました。

第六　健康

貝原益軒は小さい時からからだのよわい人でありました。ある時益軒は「自分のようにからだがよわくてはわかじにをするかも知れない。

もしそうなればどんなに學問をしても何のやくにも立たない。これからはできるだけからだに氣をつけよう。」と思って、いろ〱の本をよむたびに、ようじょうのことを書いてあると書きぬいておいて、よくそれをまもりました。

そのうちにからだがしだいに丈夫になり、年をとってもおとろえず、八十五さいまでも長生をしました。そうしてよい書物をあらわし、世のためにつくしました。

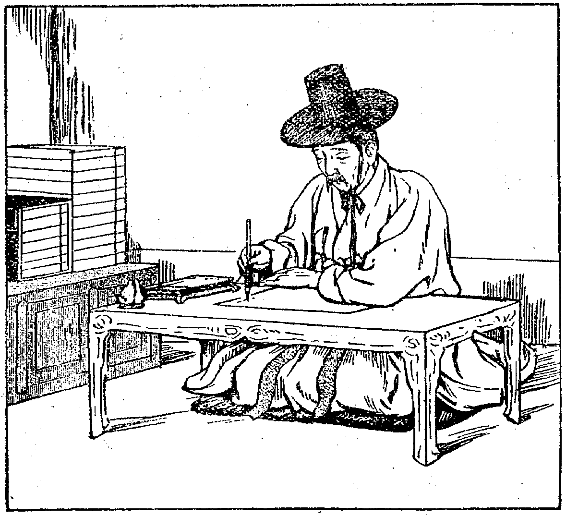
藥ヨリ養生

第七　規律

成牛溪は幼い時から、食事や學問をきまりよくしました。又人から手紙をうけとると、すぐ返事を出すことにしていました。

人と約束をした時には、そのあいてが目下のも

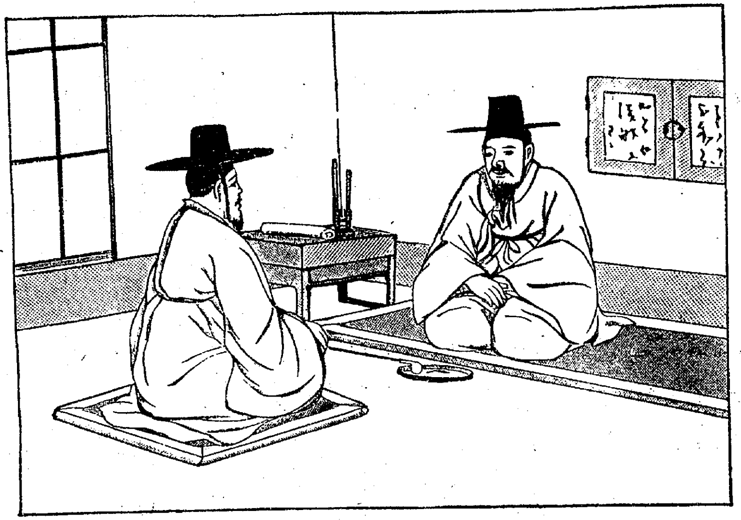
のであっても、けっしてたがえたことはありませんでした。そのほか日々の仕事にもきまりを立ててよくまもりました。又道具なども置場所をきめておきましたから、用のある時に困るようなことはありませんでした。



第八　禮儀

洪錫祜は學問がふかい上に、禮儀のたゞしい人でした。いつもみなりをたゞし、もののいゝ方をつゝしみ、すこしもあいての氣持をわるくするようなことはありませんでした。又どんな人に出す手紙でもことばづかいに氣をつけて、ていねいに書きました。

禮儀は人の心をやわらげて、お互を親しくさせるものです。人にはていねいなことばをつか



い、人の前をとうる時にはえしゃくをするものです。人の話を立ちぎきしたり、人の家をすき見するなどは大へんよくありません。

人と親しくなると、何事もぞんざいになって、ながいつきあいができないものですから、親しい中にも禮儀をまもることが大切です。

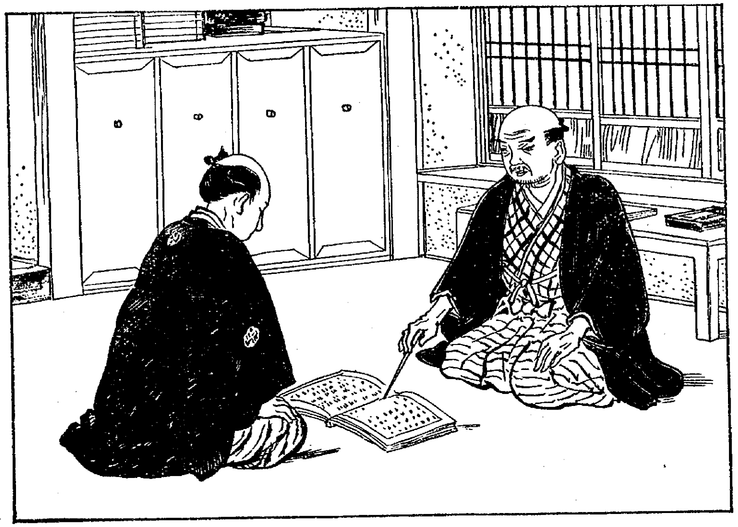
第九　勤勞

金琮潾は早く父母をなくした上、大へんまずしかったので、近所の人々にやとわれてやっとくらしていましたが、一しょうけんめいにはたら

きましたから、だん〱くらしがよくなりました。 それからも荒地をひらいて田畑にし、野原に木を植えつけて林をつくり、又蠶をかったり、牛やにわとりをやしなったりして、少しのひまもむだにせず、一生の間よくはたらきました。

第十　忍耐

大野了佐は中江藤樹にねがって醫者になろうとしました。 そこで藤樹が一さつの本を取出して、わずか二三行のところをくりかえしくり

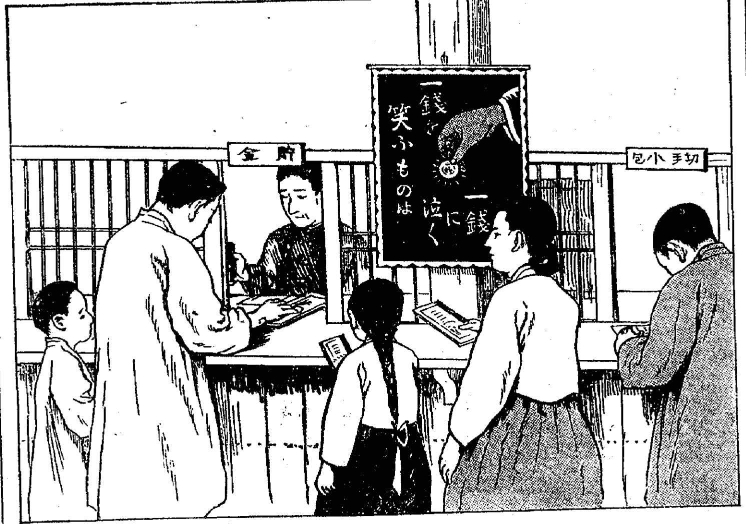


かえしおしえてくれましたが、なか〱おぼえることができませんでした。 それでも了佐はけっしてやめようとはしません。 おぼえてはわすれ、わすれては又たずねました。 このようにこんきよくべんきょ

うしましたので、後にはとう〱醫者になることができました。

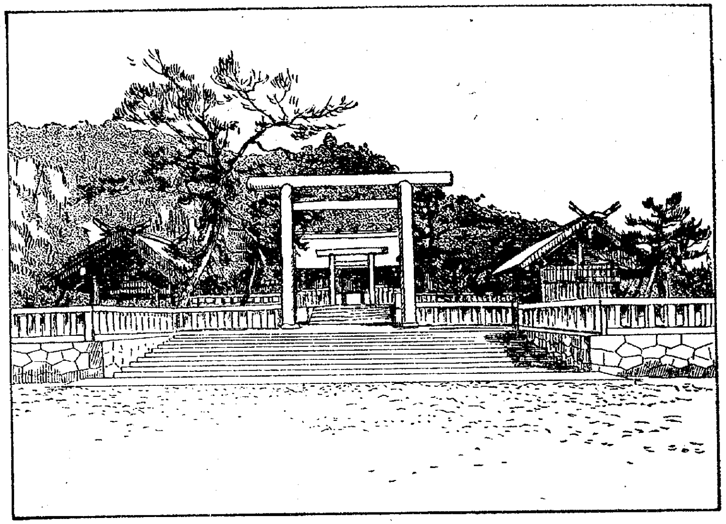
藤樹はある時、弟子たちにむかって「自分は了佐のためにずいぶん骨をおったが、了佐にあの忍耐がなかったら、とうてい醫者にはなれなかったであろう。人は忍耐さえすればどんなことでもできないことはない。」といってきかせました。

第十一 貯蓄



わずか一枚の紙でもしまっておけば、入用な時のやくに立ちます。おつかいやお手傳などのごほうびにいたゞいたお金も、貯えておくと學用品などを買う時のやくに立ちます。わずかだからといって物をそ

まつにする人は、いつまでたっても貯蓄をする
ことができません。
人はいつでも丈夫でいるとはかぎりません。
又火事や水害などにかゝらないともいえませ
ん。ふだん貯のない人はそんな時にすぐ困る
ばかりでなく、人にまでめいわくをかけること
があります。
それですから私どもは子どもの時からむだづ
かいをせず、貯蓄の習慣をつけておかねばなり



ません。

第十二　神をうやまえ

わが國にはどこにも神社があります。これら
の神社には天照大神をはじめ、だい〳〵の天皇
や國のためにてがらのあった人々がまつられ

てあります。　京城の朝鮮神宮には天照大神と明治天皇をおまつりしてあります。

わが國の人はむかしから神をうやまう心が大そうあつく、まごころから神社におまいりしています。　私どももおまいりをして、よく神をうやまわねばなりません。

第十三　迷信におちいるな

昔高麗の世に安珦という人がありました。　尚州の役人になった時、三人の巫がまわって來て

あやしい神をまつり、天井から聲を出して、それを神の聲だといゝふらしました。　人々はおどろきおそれて、その神をまつるためにたくさんのお金や品物を出しました。

安珦はこんな迷信をやめさせようと思い、その巫たちをとらえてろうやに入れました。　巫は

「自分たちを苦しめると、きっと神から罰せられます」といゝましたが、安珣は少しもおそれません。　二三日の後、巫はとう〱「私どもが悪うございました。　これからはけっして人をだましませんから、どうぞおゆるしください」とあやまりましたので、安珣はふかくいましめた上、ゆるしてやりました。

第十四　公正

勝安芳がある殿様にたのまれて、鑄物師に大砲をつくらせました。　鑄物師はお金をたくさんもうけようと思って、銅を少くしてそまつな大砲をつくりあげました。　そうしてこれをおさめるために、安芳の前に五百圓のお金をさし出して「これは御用をお申しつけくださったお禮です。　どうぞおうけ取りください。」といゝました。

安芳はそのお金をうけ取りません。そうしてその行のあやまっていることをいゝきかせて、りっぱな大砲につくりかえさせました。

第十五　人の名譽を重んぜよ

よい行をしていると、いつか世間によいひょうばんが立ちます。よい行をしてよいひょうばんが立つと、その人の名譽は高くなります。名譽には高いひくいのちがいがあっても、名譽を持たぬ人はありません。人の名譽を重んずることは私どものつとめであります。

昔京都の伊藤東涯は江戸の荻生徂徠とともにひょうばんの高い學者でありました。

ある日一人の弟子が徂徠の書いた物を持ってきて、東涯に見せました。

するとほかの弟子どもがそれを見て、大そう悪くいゝました。その時東涯は「そのようにかろがろしく人を悪くいうものではない。ましてこれは大そうりっぱなものです。」といゝましたので、弟子どもはふかくはじ入りました。

第十六　まごころをつくせ

二宮尊徳は十二さいの時、おとうさんにかわって川ぶしんに出ましたが、まだ一人前の仕事ができないのを心ぱいして、ほかの人がやすんで

いる時にも土や石をはこびました。その上、うちへかえると、夜おそくまでわらじをつくって、あくる朝、それを仕事場に持っていきました。そうして「私はまだ一人前の仕事ができませんので、皆様のお世話になります。」といって人々

にあげました。人々は尊徳のま心に大そうかん心しました。

第十七　公徳

ある人がロンドンにいって、公園をあるいていると、一人の子どもがないていました。その人がわけをたずねると、「風のためにぼうしをとばされましたが、公園の草をふんではならないので取ることができません。」とい丶ました。その人はかん心して、つえをのばしてぼうしを取っ

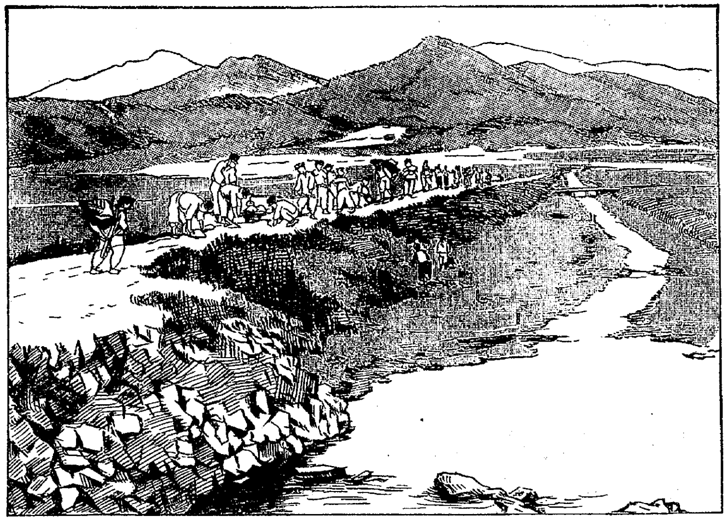
てやりました。

こんな子どもが道でまりなげをしたり、公園の木をおったり、學校の物をそまつにするようなことがありましょうか。」汽車や汽船の中でお互に席をゆずりあったり、のりおりにじゅんばん

をまもったりするのは氣持のよいものです。道路や下水にごみをすてたり、左側通行のきまりや車道・人道のくべつをまもらなかったりすると、多くの人がめいわくをします。これらはみな自分のふちういやわがまゝのために、人にめいわくをかけるのですから、氣をつけなければなりません。

第十八　公益

全羅南道の西倉公立普通學校のそばに、干潟を



うめ立ててつくった道路があります。雨がふるとすべるので、人々が大そう困りました。

ある日その普通學校にかよっている兒童が「これではわれ〱が困るばかりでなく、部落の人の不便もひとゝうりで

はない。これからとうるたびに石を一つずつおくことにしようではないか。」とそうだんして、さっそくはじめました。しかし長い道のことですから、仕事が思うようにすゝみません。そこで日曜日にもあつまって、小さいものは石をあつめ、大きいものはそれをちげではこびました。これを見た部落の人たちもかん心して、手傳いましたので、道が大そうよくなりました。

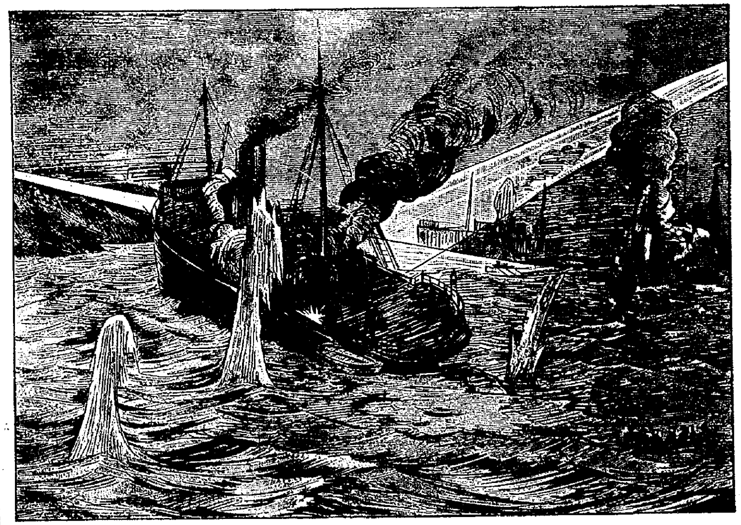
第十九　恩にむくいよ

京畿道のある普通學校の先生がほかの學校にかわることになりました。先生の教をうけた卒業生たちはこのことをきいて大そうおしみました。そうして御恩がえしのために「にもつだけでもはこんであげ

よう」とそうだんしました。それから牛やちげをよういして、先生のにもつを一つものこさず、遠いところまではこびとゞけました。

第二十　忠君愛國

明治三十七八年、わが國がロシヤとたゝかった時、わが國のかんたいはてきのぐんかんを旅順の港の中にとじこめようとして、その港口に三度も汽船をしずめました。このことにあたった人たちはちうぎなぐんじんばかりで、くらい



夜中に港口へすゝみ、てきの大砲のたまが雨あられのようにとんで來る中で、いさましくはたらきました。又このことにあたる人をきめる時には、いつものぞみてが多くて、先にいった人は「ぜひ今一度私をやっ

てください。」といゝ、先にいけなかった人は「今度こそは私をやってください。」と申し出ましたので、だれにきめてよいか困ったほどでありました。

K710.1∼N1a∼3

昭和六年三月二十五日翻刻印刷
昭和六年三月二十八日翻刻發行

普通修身兒三

定價金八錢

著作權所有

著作兼發行者　朝鮮總督府

京城府大島町三十八番地
翻刻發行兼印刷者　朝鮮書籍印刷株式會社
代表者　井上主計

京城府大島町三十八番地
發行所　朝鮮書籍印刷株式會社